

## 4 人の出生者の報告についてのコメント

### Comments on Four Presentations



ケン・ダニエルズ  
Ken Daniels

カンタベリー大学（ニュージーランド）

University of Canterbury (New Zealand)

---

#### コメント

まず初めに、非常に興味深く、かつ難しい内容のフォーラムにご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。4人のプレゼンテーションを聞き終えて、ある意味で、4人ともパイオニアであるといえると思いました。ご両親が精子ドナーの助けを借りると決めて、今日登壇された4人は、ドナーは生まれた自分たちにとっても、とても大きな意味があるとおっしゃっていました。でも4人が皆、同じ経験をしているわけではありません。しかし、4人がどういう努力をしてきたか、また制度を変えたいと希望していることや、制度を変えて、重要な存在であるドナーに何とかアクセスしたいという気持ちを持っているという話を伺いました。

4人の皆さんは、ある意味での世界全体のトレンドです。皆さん、ドナーの情報にアクセスをしたい、可能であれば会いたいといっていました。これは世界的なトレンドなのです。今、世界中の多くの出生者がDNA検査をして何とかドナーを探そうとしています。DNA検査だけではありません。例えば、ソーシャルメディアやWEBサイトなども使っていますし、さまざまなグループが立ち上がって、何とか生物学的な親を探そうとしている人が増えています。世界中で30を超える国々が、ドナーは匿名であってはならないという立法措置を持っています。30を超える国で、子どもにドナー情報を提供しなければならないということになっているのです。しか

し、日本はこの30の国に含まれていません。本日のイベントをきっかけに、何とか日本でもドナーの情報にアクセスができるようになる方向に進んで欲しい、これがこのイベントの目的です。

今、我々の住む世界は以前とは大きく変わっています。かつては、世界中どこでも、精子や卵子の提供を受けたことは秘密にしていた、ドナーはいつも匿名とされていました。

3年前に70代の女性から連絡がきました。この女性は50歳になってからご両親が精子提供を受けていたということを知ったということでした。それで、その女性はDNA検査でトレーシング、つまり血縁を追跡して、その結果、ドナーはすでに亡くなっていることが分かりました。しかし、そのドナーには二人の息子ともう一人、娘がいるということも知りました。その女性は、彼らが誰かということも分かっているので、何とか彼らと会えるようアレンジしてくれないかと、私に言ってきました。それは関わっているすべての人たちにとって簡単なことではありません。でも最終的には、うまくいきました。その結果、異父母きょうだいととてもいい関係ができています。

70歳になっても、自分が生まれるのを助けたドナーを探そうとする人もいます。自分たちが人間として生まれることに関わった人を探そうとするのです。

今日、申し上げたいのは主に二つの議論についてです。二つの意見がありまして、そもそも秘匿すべきである、知られるべきではないという考え方があります。また、ドナーと生まれた人はまったく接触するべきではないという考えもあります。これらについて説明した上で、私はこれとは別の考えを述べようと思っています。

まず、最初に提供を受けた家族を守るためにドナーは匿名であるべきであるという議論があります。つまり、ドナーは脅威であり、知られないほうが安全であり、ドナー情報が分かると、家族環境を損なうのではないかとという考え方です。育ての両親と子どもという家族の境界を守っておきたいというのです。ドナーの存在が表に出てくれば、もはや家族に介入することになってしまいます。まだ、家族を形成中の生まれた子どもが小さいうちはそうした意見が強いかもしれませんが、ところが、今は成人、大人の話をしています。生まれた子どもはもう子どもではなく、家族が形成された後の話を、今、しているのです。

私がニュージーランドで関わった研究の話をししましょう。育ての親は、そもそもこれを秘密にしておいたほうがいい、伝えないほうがいい、ドナーなんて存在しないふりをしたほうがいいと言われていました。今日の4名の方たちも皆、同じような話をされていました。ところが生まれた人が年齢が高くなっていくと何だか親に違和感を持つようになるのです。また、当事者が違和感を持つ中で親のほうも悩み始めたり、秘密にしておくべきかどうかを考えるようになります。特に、子どもが「私はどうやって生まれてきたの」と質問するようになると、親はうそをつきたくないと思います。その上で、どのように提供精子で生まれたこの家族の歴史を子どもに伝えるべきかと相談にくるのです。

興味深いことに、親御さんから、子どもにどうやって告知すればいいのかと、子どもたちは提供精子で生まれたんだと、どのように伝えればいいのかという相談をよく受けます。違う言い方をすれば、子どもに対して、家族形成の歴史をどう伝えたらいいのかと、言い換えることが

できます。私は彼らにこう答えます。これはファミリーとしての話なのです。子どもに焦点を当てて話をすると、子どもを疎外してしまう可能性があります。つまり子どもが自分だけ違うと感じてしまうかもしれない。なので、家族が他の家族とはちょっと違うのであって、子どもだけが違うわけではない、家族として特別な歴史があると話しなさいとアドバイスします。ドナー情報が得られないとしても、家族はどのような過程でできたのか、それを隠しておくで逆に家族の関係が損なわれるといいます。家族に秘密があることが家族関係を損なうので、ドナーの存在は秘密ではありませんと話します。私もたくさんの研究をしてきましたが、その結果、家族に秘密があると、家族も非常にづらい、よろしくない状況になってしまうことが分かっています。今日の4人の皆さんもそういうことをおっしゃっていました。

もし、家族がどのように形成されたのか、それを隠しておくのであれば、それはすなわち、それを恥ずかしく思っているということです。自分が納得していないもの、もしくは、恥ずかしいと思うもの、後ろめたいものを隠そうとします。もちろん、医師が秘密にしておきなさいと助言をしたわけです。レシピエントである親たちにそう言ったのは医師です。

私は、19歳から46歳までの成人21人を対象とする研究に関わったことがあります。その結果を今日は皆さんにも紹介したいと思います。年齢幅はかなりあるのですが、21人は異なる結論を出していました。それはドナーの存在のために家族が何らかの形で邪魔されたり傷つけられたりするというこの概念に異議を唱えているのです。彼らが言ったことは、自分のアイデンティティを考えると、これは家族関係によって影響を受けるといいます。言い換えれば、人のアイデンティティは家族関係の影響を受け、家族の歴史を理解したいのであれば、家族の間でのコミュニケーションが大きく影響します。誰が私の家族なのだろうと考えたとき、どれだけ家族とつながりがあるのか、また血縁があるかないかが影響すると言っています。

私は、ドナーとの接触に関しても時代は変わってきていると思います。どう時代が変わっているかということ、より前向きに、能動的にオープンにしていこうという時代が変わってきているといえます。私たちは積極的にオープンにすることをすすめています。でも親が納得して家族の歴史と情報を共有できる用意（覚悟）がなければなりません。親が家族の雰囲気をつくります。でも、その親たちに影響を及ぼしているのは社会の雰囲気とか、専門職、医師などで、それも考えなければいけません。一部の人は今も家族を守らなければいけない、生まれ人たちが出自を知ること、ドナーを知ること必要はなく、ドナーと接触する必要はないといえます。でも私たちが彼らを変えていかないといけません。

そこで、私から皆さんに質問をしたいと思います。もし皆さんが遺伝の半分の情報を知らなかった場合に、皆さんはそのわからない半分も、私にとって重要な一部であるから知りたいと思うのでしょうか。家族を守りたいという人の中には、遺伝子は大事ではなく、だからドナーは関係がないという人がいます。ところが、調査研究で聞いた意見を紹介しますと、自分が家族をどのように理解し、ドナーをどのように理解するかという点において、どの情報もとても重要だと思います。今日の4人の皆さんも家族は大事だと言いました。遺伝子の話については、遺伝子で家族ができるものではなく、愛情や関係が大事で、共有された経験が家族となるのに重要な要素であると言っていました。全員が、ドナーと父親をはっきり区別していました。そして遺伝的な親ではないが育ての親がとても大事であると言っていました。遺伝的なつながりではなく、一緒にい

ることが大事なのだ。だけど、同じドナーから生まれた異父母きょうだいやドナーへの関心はそれとはまた別ものなのです。ドナーとコンタクトをとりたいとか、ドナーに会いたいと思う最初のころは、これは生まれた人が言っていたことですが、両親に対して裏切りではないか、感謝していないのではないかと、育ての親が本当の親は私たちでしょうというであろうと思っていたといいます。生まれた人の半分以上がドナーを知らないことに納得していませんでした。ドナーを知らないということに取りつかれて、強迫観念のようになっていました。リーンさんも今日、そんな話をしていましたが、ドナーに会った自分は、何だか解放された気がたと話していました。ドナーや異父母きょうだいと接触すると、アイデンティティとか、家族に関する理解が深まったと言っています。21人の当事者のうち5人が異父母きょうだいに会って、あと9人は異父母きょうだいに会いたいと言っていました。大事なものは、ドナーだけではないのです。拡張家族とでも言いましょうか、どこかにいるのかわからないきょうだいにも関心があるのです。

これから分かるのは、家族のウェルビーイングのためには共有、コミュニケーションが大事なことです。一体、誰が家族を守らなければいけないから秘密にしろと言っているのでしょうか。何を根拠にそんなことを言っているのでしょうか。そんな根拠、どこにもないではないですか。生まれた人がそんなことを言っているのを聞いたことはありません。家族を守りたいと言って、秘密にして、恐怖心を持つ。そちらのほうが家族関係にマイナスの影響を及ぼすでしょう。

二つ目の見解として、ドナーを匿名でなくしたら、ドナーが現れなくなってしまうから、特定するべきではないという考えについてです。そういうのは、不妊治療を提供している関係者で、目の前にいる人にそう話します。例えば、患者さんが目の前にいたとき、不妊の人が目の前にいるときにです。でも、これは不妊治療に限った問題ではないのです。家族をつくる話なのです。家族の問題は、その家族がクリニックで話をするときだけではなく、その後、子どもが生まれて大人になっていくとき、家族が形成されるときにこそ問題がはっきりとしてきます。よく言われるのは、ドナーは匿名であるべきで、ドナーは大事ではないということです。

数年前に、ドナーを人とは思っていないと言った人がいました。ドナーと会うといっても、それは目的のために配偶子を提供しているだけだから何の意味もないと言った人もいます。大事なものは精子と卵子だけではないかと、提供した人は関係がないのではないかという意見もありますが、生まれた人たちはそうは考えていません。ドナーはとても大事な存在であると言っています。ドナーが匿名ではなくなったら、もう提供してくれないのではないかという意見もありますが、より多くの調査研究では、そうはならない、ドナーは減らないといいます。スウェーデンは世界で初めてドナーの匿名性を廃止いたしました。実際、ドナーの数は減ったものの、私や婦人科の医師の研究によると、ドナーの数はその後、増え、最終的に増加に転じました。しかし、大事なものは、どういうドナーが現れるようになったかです。ドナーのタイプが変わりました、より年齢が上がって、結婚していて、子どもがいるドナーが増えたのです。ひと昔前であれば、ドナーは若くて未婚で、まだ自分の子どもがいない人が多かったのですが、それが変わったのです。どうやってドナーをリクルートするかは確かに難しい問題で、特にクリニックや医者にとっては大きな心配事です。しかし、ここで文化を変える必要があります。ドナーは単に人であるというよりは、とても貴重な存在であると考えなければいけません。今日、4名の当事者がそ

ういう話をしていました。貢献をしたい、役に立ちたいと思っているドナーであってほしい。成人になった出生者は、できればドナーに会いたい、できれば優しい人であってほしい、提供したのは役に立ちたい、価値があるお手伝いをしたいという気持ちで提供したとっていたいわけです。そうすればコンタクトを避ける必要もありません。実際、接触をしていいこともたくさんあります。

これまで多くのドナーについて、ニュージーランドでも研究しています。以前のドナー、すなわちまだ匿名の時代だったときに提供した人たちでも、情報を開示してもいい、会ってもいいという人がほとんどでした。ただ、それを管理するシステム自体が難しいのです。慎重に管理をしないとコンタクトをとることも、会わせることも簡単ではない。また、昔からドナーは不足していました。卵子と精子は昔から足りなかったし、これからも足りないでしょう。でも、それは匿名かどうかということではなく、精子や卵子を提供したいと思う人がそもそも少ないからです。

私のまとめと提案です。昔の提供医療の特徴は秘密、隠す、匿名でした。しかし、それは昔のことです。これからは新たな時代が始まります。ただ、一部の人は恐れています。昔から新しい時代が変わることを恐れる人がいます。よく言われてきた議論について、今、紹介をしたとおりでありますが、それに立ち向かっていく必要があります。実際に研究で証拠が挙がっています。今日4人の方からの話に出た権利とニーズを考えると、なぜ日本はこの方向に進んでいないのでしょうか。でも今日の話聞いて、変化し、挑戦し続けることです。多くの場合、対立しているさまざまな当事者の権利とニーズについて議論が行われます。親、ドナー、生まれた子ども、そしてもちろん医療提供者がいるでしょう。そのようなアプローチは勝者と敗者がいることを意味する傾向があり、誰かがトップに出なければなりません。研究と専門家の証拠は、配偶子提供の助けを借りて、家族を築くというより前向きな見方に焦点を移すと、これはすべての人にとってお互いに有利な状況であることを示しています。それは生まれた子ども、家族関係、そしてドナーにとってもよりポジティブです。日本でも、一部法改正されましたが、でも日本はまだ努力をしなければなりません。

よく言われるのは権利とニーズです。渦中の当事者、両親、子ども、ドナーは立場が違い、皆、利益に相反があります。また医師、クリニックも違う意見と立場があり、そういったときに何だか勝ち組と負け組がいるかのようで、誰かが勝たなければいけないかのように聞こえます。でも研究や、専門家の調査結果によりますと、焦点をもっと変え、見方を変えて、配偶子提供で家族をつくると考えると、みんなが勝てる、ウィンウィンになることができます。それは当事者にとっても家族関係にとっても、ドナーにもプラスにすることができるのです。

最後に、法改正は非常に重要ですが、文化のおよび社会的な雰囲気の変革も伴う必要があります。もちろん、法制度によって世の中を変えることはできるので、ぜひ、日本でもそれを期待します。以上です。ご清聴ありがとうございました。

## Comment

I want to begin by thanking everybody for the opportunity to take part in this exciting, and I think most of us would agree, very challenging forum. I'm delighted to be sharing with the four contributors and with Yukari. We have heard very powerful and personal experiences and journeys of these four people who in many ways are pioneers. They've talked about their parent's decision to use a donor, and the fact that the donor has considerable significance and importance for them. Their experiences have not all been the same, but they have talked about their desire and the efforts they have made to change the system in different countries to allow them to follow through on the significance and importance of a donor.

These four people are, if you like a part of a worldwide trend of donor conceived persons who are wanting to have access to information about the donor and to the possibility of meeting them. There are now large numbers of donor conceived people who are using DNA testing to try and find the donor. But it's not just DNA testing, there are people who are using the social media and media websites and many groups that have now been formed to try and locate their donor. Over 30 countries in the world have now legislated that donors cannot remain anonymous. In other words, they must be available to the donor conceived persons.

Japan is not one of those that 30 countries, and of course this forum is designed to hopefully move in that direction. We're now living in a very different world than what we were previously. The previous world was characterized by donor insemination and sperm donation and egg donation as being characterized about secrecy and that the donors would always be anonymous.

Three years ago, I was approached by a woman in her seventies who had discovered at the age of 50 that her family had been built with the help of a donor. She had traced the donor through DNA testing and had discovered that he had died. She discovered, however, that there were two sons and a daughter from this donor, and she knew who they were and asked if I could facilitate a meeting between them. It was a very challenging time for all of the parties involved, but it was very successful and there have been good relationships that have been established.

Even at the age of 70, people are seeking out the donor that helped make their contribution to them being a person. What I planned to do today and my contribution is to say, that there are two main arguments that are often put forward that oppose donors being known to others. In other words, people who argue that they should be no contact between the donor and the offspring. I'll put these arguments forward and then I want to try and respond to them, exploring

them and challenging some of the arguments that are used. First of all, the argument is often that the donors should remain anonymous so as to protect the families that have used donor conception. In other words, the donor is perceived as a threat and in this argument, there is a belief that having access to the donor would be damaging to family relationships.

There is a desire to maintain the family boundary based on the parents and the child offspring and the presence of a donor would in effect amount to interference in the family. For some, perhaps it is easier to argue this when the child is a child and the parents are forming their family. However, we are focusing on adults and not children, and the family has become a family. I want to talk a little bit about some research that I have been involved in not at New Zealand, which shows that parents had often been encouraged to keep their family building history a secret and pertained that the donor did not exist.

We've heard about that from each of the four contributors tonight, but as the offspring became older, this approach did not feel comfortable to these parents and many parents started to question whether they should be keeping it a secret. This was especially so when the children started to ask them, where did I come from? The parents felt very uncomfortable and did not want to lie to their children. They asked for assistance on how to share the family building history with the children. It's very interesting that they often said, how do I tell my child that they were conceived as a result of donor sperm?

My response to them is that a different way of looking at this is how do I share with my child and our family building history, because this is a story about us as a family, if in fact you focus the story on the child, you stand the risk of marginalizing the child and the child feeling very different. If there is a difference, it is that the family is different not that the child is different. What these parents reported was that it was secrecy about family building history that was damaging to family relationships, not the presence of a donor. It was as a consequence of that, that it was not possible to find the donor and information about them. We know from research a lot about family secrets and their impact, and it is not a good picture.

We've heard accounts of that today. If you are keeping your family building history a secret, you are by implication saying that you are ashamed of what you have done, because we only keep secret those things we are uncomfortable with or ashamed of. Of course it was doctors who frequently advised the parents to keep it a secret. One of the studies that I was involved in was of 21 adult donor conceived persons aged between 19 and 46. This is quite a wide range. They came up with a number of different conclusions, which I want share with you because it challenges this notion that the family in some way will be disturbed or will be harmed because of the presence of a donor. What the offspring said is that when I think about viewing myself, that this is impacted by family relationships. In other words, my identity is impacted by family

relationships.

If I want to try and understand the family history, that's impacted by family communication. If I want to ask the question who is my family, that's impacted by our understanding of connectedness and of kin relationships. I'm suggesting that we are entering a new era in relation to donor conception and that that new era is one that could be seen to be proactive. We actively encourage openness. We are actually encouraging openness in terms of relationships and work needs to be done with parents to get them to the stage where they feel confident enough to share that history and that information. Parents set the culture for family relationships, but those parents are influenced by professionals and perceived social attitudes, and we need to work to change some of those.

Some people wanting to protect the family would argue that there is no need for donor conceived persons to know the identity of a donor or to have contact with them. Well, we have heard today that that is not the case. I want to ask you, if you did not know about half of your genetic history, would you want to know? It's part of me, it's part of what is important. Some people in wanting to protect the family may also argue that genes are not important, so the donor is irrelevant. Well, yes, but here's what some of these people in the study said and I think it's all very important in terms of how they understood the family and how they understand the donor.

All of the people spoke lovingly of their families and I think again, we have heard that today. They talked about genes not being the basis for making a family. They talked about love, relationships and shared experiences are the factors that make a family. All participants made a clear distinction between dad and the donor. They saw these as two different people, and some of them were especially close to the non-genetic parent. As one of them said, "to... to be a dad, takes a lot more than a genetic link", but these feelings did not rule out the interest in the donor and half siblings, but they did not see the link with the donor as necessarily being primarily an emotional one.

The interest or contact with the donor was perceived by some parents as negative and this is what the donor offspring were saying was seen as being disloyal or ungrateful. How could you want to know about the donor? We are your parents, they would argue. Well, over half of the people in this study were uncomfortable about not knowing the identity of a donor, and the not knowing had become an obsession for some of them. And I think we heard Leen talking about that. Those people who have met the donor, talked about how this had been a freeing experience. This and contact with half siblings had helped with identity issues and understanding of family. Five of the 21 had met half siblings and a further nine would like to meet the half siblings, so the contact and the focus has not just been on the donor, it's on the

extended family, if you like.

In summary, confidence in family building is crucial and arising from this, the importance of sharing and communication is key to the wellbeing of the family. We need to ask the question, who is it that is arguing that the family needs protection and on what basis. I don't hear that argument coming from the donor offspring. If you feel you need protection, you are always going to be on the defensive and scared, and this will impact on family relationships.

The second argument that is put forward against donors being identifiable is that if you remove anonymity, we will not be able to recruit donors. This is an argument that is often made by those providing clinical services to the infertile, and is based on responding to the persons in front of them. When the doctor is seeing a couple or an individual, then that is the person who is presenting the issue. But this is not just about treating infertility. This is also about building families and family matters are not in evidence when the couples are being seen in the clinic. But rather later as the child is growing and becoming an adult. These are the times when issues like this will begin to emerge. It is argued that the donor is anonymous. In other words, the donor is unimportant.

One person a few years ago actually described the donor as a non-person. Seeing the donor as just someone who donates their gametes as a means to an end is unhelpful and quite unrealistic. It is only the gametes that are important in this argument, not the person. Our contributors today have said that this is not how they view it. These people, the donors are very significant and very important. It is argued that donors would not be available, if donor anonymity was removed. There are a growing number of studies that say that this is not so. In Sweden, the first country in the world to remove donor anonymity, there was a decline in the number of donors. But then research, that I and one of the gynecologists undertook, showed that the number of donors had increased since the removal of anonymity. But what was significant was that the types of donors who were donating became and were very different. They tended to be older men, married men and with children, in contrast to the donors of the earlier era, who tended to be younger, single, and not have any children.

The issue about recruiting donors has always been a difficult one for clinical and for the medical profession. But we need to change the culture. I think we need to see the donor, not only as a person, but as a very valuable person as our four contributors tonight have said who wants to contribute. I think in my experience, the adult donor conceived people want to see and hope that the donors are kind and helpful people who donated because they wanted to help. They wanted to contribute something that is of value.

From an offspring point of view, the message is that they hope donation is based on kindness and concern for them. There is nothing to fear about contact and in fact, there are

many positives. Previous donors and we have been working with many of them in New Zealand who were recruited -- when the system was one of anonymity, more than willing to share information and to meet, but the whole process of managing that becomes very challenging and has to be very carefully managed.

I should also point out that there has always been a shortage of donors, both egg and sperm, and there will continue to be a shortage of sperm and egg donors, not because of anonymity, but because donating sperm and eggs is not something that lots of people want to do. My suggestion and conclusion is that we can think about the old era, which was characterized by secrecy and anonymity, but that old era is old, and what we're looking at now is a new era. But of course, some people fear changing from the old era to the new era and the arguments that have been put forward, and I've suggested two have them, have to be challenged. There is evidence available that these arguments do not stand up to close scrutiny.

If you think about the rights and needs of the people that we've heard from tonight, then why is Japan not moving in this direction? This has started to change in terms of what we have heard about tonight, but the challenge is to continue it. Often, the arguments are made about the rights and needs of a different parties being in conflict. There would be parents, the donors, the offspring, and of course, the health providers. Such an approach tends to mean that there are winners and losers; somebody has to come out on top. The research and professional evidence indicate that if we change our focus to a much more positive view of family building with the assistance of gamete donation then this is a win-win situation for everyone. It is more positive for offspring, for family relationships and for the donor.

One final comment, legal change is very important, but it must be accompanied by cultural and attitudinal change. The legal can of course, promote these changes and I hope that we will see that happening in Japan.

Thank you.



### ケン・ダニエルズ教授 略歴

ニュージーランド在住。提供精子での人工授精（DI）、および、生殖補助医療分野に44年たずさわってきた。彼はDIを利用しようとする患者や家族、そしてドナーのカウンセリングや、DIを検討している親のための準備セミナー等をニュージーランドのみならず、諸外国でも精力的に実施し、世界中の不妊治療を受ける人々のグループや組織のために、数多くの講演もこなしてきた。7か国でDIについての調査を実施し、150本以上の学術論文や専門雑誌のための記事を執筆するとともに、諸外国のこうした非パートナー間生殖医療に関する政策づくりにもコンサルタントとして貢献してきた。ニュージーランド政府の生殖補助医療に関する倫理委員会の副議長や政府の生殖補助技術諮問委員会の副議長を14年間つとめた。ニュージーランドのクライストチャーチにあるカンタベリー大学で今も教鞭をとっており、2014年には、ヒト生殖とメンタルヘルスの支援における彼の業績が認められ、ニュージーランドメリット勲章（ONZM）のオフィサーに任命されている。

### Ken Daniels Biographical Note

Dr. Ken Daniels has been working in the field of donor insemination (DI) and assisted human reproduction for 44 years. He has provided counselling for parents, families and donors, co-conducted preparation seminars for those considering DI, spoken to numerous consumer groups and organisations, conducted research in seven countries, written extensively and acted as a consultant on policy development in several countries. He has published over 150 papers in academic and professional journals. He was Deputy Chair of the National Ethics Committee on Assisted Human Reproduction and the New Zealand Government Advisory Committee on Assisted Human Reproduction for 14 years. Ken is Adjunct Professor of Social Work at the University of Canterbury in Christchurch, New Zealand. In 2014 he was appointed as an Officer of the New Zealand Order of Merit (ONZM) in recognition of his work in assisted human reproduction and mental health.